

(熊本県立松橋支援) 学校 平成 29 年度学校評価表

1 学校教育目標						
一人一人の児童生徒を大切にし、それぞれに応じたきめ細かで専門性の高い教育及び地域等との連携により、個性が輝き、生き生きと活動する子どもの姿を実現する。						
2 本年度の重点目標						
(1) カリキュラム・マネジメント体制の確立 (2) 防災等の危機管理体制の構築と危機意識の高揚 (3) 知肢併置校及び分教室設置校としての特色ある学校づくりの推進 (4) 専門性の向上 (5) 職員一人一人が力を発揮しやすい学校づくりの推進 (6) 進路指導の充実 (7) いじめ防止に向けた体制の確立及び人権教育の推進						
3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	知肢併置校及び分教室設置校としての特色ある学校づくりの推進	松橋支援学校の児童生徒としての自覚と誇りの育成	全児童生徒、全職員でポッチャによる交流大会を実施する。	各学部学科分教室から実行委員を選出し校内ポッチャ大会を推進する。	A	全児童生徒参加での校内ポッチャ大会を開催し、競技だけでなく、応援でも盛り上がり成功裡に終えた。松橋支援学校の児童生徒として、互いを認め合い、取り組むことができた。
		高等部専門学科創設10周年行事の実施	高等部専門学科創設10周年を祝う関連行事を成功させる。	高等部専門学科の生徒の行事における活躍の場を設け、外部へ10周年を発信する。	A	専門学科創設10周年の記念行事を、生徒が主体となって実施し、成功に導いた。また、進路と関連させた「生徒と企業の懇談会」も初めての企画であったが、専門学科を外部に発信することができた。
	職員一人一人が力を発揮しやすい学校づくりの推進	カリキュラム・マネジメント推進委員会の設置と有効活用	PDCAサイクルに基づいて、行事の見直し・精選を実施する。	カリキュラム・マネジメント委員会において行事の見直し・精選を検討し、改善を図る。 職員の勤務実態を把握し、組織全体で負担感軽減に取り組む。	A	行事の見直しを直後プランで実施し、次年度へ繋げることができた。 また、行事の精選については、各学部・学科・分掌部で業務改善について検討し、改善案を2月末までにまとめることができた。 職員が退勤時間を意識して、仕事に取り組むようになってきた。
授業の充実	新学習指導要領と児童生徒の実態に応じた教育課程編制のシステムづくり	活動内容の設定と指導形態、授業時数等の検証	学部・学科間の活動内容の一貫性・関連性及び授業形態や単元期間について検証を行う。	児童生徒の個別の指導計画から指導内容や活動内容を選定し、年間指導計画を作成する。単元後の反省を関連する単元や次年度の年間指導計画に生かす。教務部会で各学部・学科の情報交換を行い、結果をカリキュラム・マネジメント推進委員会に提出する。	B	学部・学科ごとのPDCAサイクルは定着してきている。新学習指導要領の実施に伴い、2学期以降は指導内容の内訳を算出する作業や教育課程の検討に多くの時間を要した。教務部会での情報交換の他、1月末には教育課程検討会を実施したが、各教科等のバランスや学部間の連携については検討できなかったため、来年度以降に検証したい。また、教科用図書の採択についても検討していく。

	児童生徒の実態やニーズに応じた授業構築、支援・指導の充実	目的が明確な研修を行い、研修での理解の深化	新学習指導要領について理解を深めることを目的に、講師招聘による研修会を2回以上行う。	新学習指導要領に関する研究に取り組む専門家を講師招聘する。研修の内容の理解度を確認するためにアンケートを行う。	B 2回にわたって、専門家による講師招へい研修を行った。第1回は、新学習指導要領の基本的な内容について講演していただき、第2回は、新学習指導要領に沿った教育課程の編成や授業作りの視点について講演していただき、内容について整理し、理解することができた。アンケートの結果から、知、肢に分けてより充実した分かり易い内容を今後検討する必要があると考えられる。
		ツールを精選し、各グループ(各学部)で内容を確定	学校業務としての児童生徒に対する実態把握や授業の構築について、取り組みやすさと充実を図る。	研究部でツールや取り組みについて検討する機会を設け、データ・記録から、部内で考察まとめを行う。	B A, Bグループに分かれて取り組んだ。Aは授業作り、授業内容について系統性、卒業後の目標を目指した内容につながるためのツール改善、構築を行った。Bは主に評価表の内容と様式を、小中高等部で検討し、決定することに取り組んだ。来年度は、それぞれのツール活用のもと、実践充実を図る。
キャリア教育(進路指導)	学校としての一貫性を持ったキャリア教育の推進及びキャリア教育の全体計画を見直し・改善	各学部の内容の妥当性、関連性	キャリア教育の全体計画を見直し改善を図る。	各学部で取り組む学習内容の教育課程への位置づけや学部間の関連づけ等を見直し改善する。	C 全体計画は、基礎的・汎用的能力の視点で修正した。今後は、各学部の現状を踏まえ、内容や系統性等を検討し、改善を図りたい。
		各学部や学科間の連携	報告会や進路学習会などを活用し、学部間、学科間の連携を図る。	現場実習や体験学習を活用し、小学部、中学部への啓発を図る。	B 小・中学部に高等部の体験学習の取組等を紹介し、報告会等への参加を募った。今後、小、中学部での事業所見学や体験参加等の広がりを検討していきたい。
	各学部学科の児童生徒のニーズに応じた丁寧できめ細かなキャリア教育の実践	学習活動の工夫、改善	体験学習や現場実習で明らかになった課題等を授業実践に反映させる。	体験学習や現場実習後に担任、進路、専門の担当でミーティングを行い、課題等を全職員で共有する。	B 現場実習後の課題把握ミーティングで各自の強みや課題等を共通理解することができた。これによる具体的な授業改善をできるところから進めていきたい。
		ニーズに応じた進路学習の実施	生徒のニーズに応じた進路学習の充実をめぐる。	卒業生や関係諸機関等の人材を活用し計画的に取り組む。	A 労働、福祉、卒業生等の人材を活用した取組は、大変効果があった。初めて取り組んだ「企業と生徒の懇談会」は、多くの企業が参加し、生徒や教師、企業がお互いに理解を深め合う貴重な学びの場になった。
	関係諸機関と連携した移行支援及びアフターケアの充実と	関係諸機関との連携	関係諸機関と積極的に連携し情報交換に努め、移行支援及びアフターケアの充実を図る。	特に、相談支援事業所や就業・生活支援センターとの連携を強化する。	A 相談支援事業所や就業・生活支援センターとの関係を深め、基本情報提供や事前の相談を丁寧に進め、卒業後の社会生活を連携して支援する準備が整った。

	進路だよりでの情報発信	情報発信	進路だよりを上期3回、下期3回発行する。	様々な研修に積極的に参加し、情報収集や専門性の向上に努める。	B	現場実習・体験学習や進路学習の取組を中心に情報発信に努めたが、福祉サービスの利用、卒業後の支援等についても分かりやすい発信をする必要を感じている。
生徒 (生活) 指導	児童生徒 行方不明 時における 捜索体制 の強化と 不審者対 応の充実	緊急捜索体制 の整備	職員の役割を 明確にし、初動 の効率化と連絡 の徹底を図る。	捜索訓練を年度 当初に実施し、反省 アンケートを基に、 よりよい対応につな げる。	B	捜索訓練を通して、役割の 確認と初動の迅速化ができた。 捜索地図を新しく作成 するなど、ハード面も整備し た。
		不審者対応マ ニュアルの整 備	職員の役割と動 きを確認し、危 機管理意識を 高める。	関係機関と連携し て不審者対応訓練 を実施して、意見 や助言等をマニ ュアルに反映する。	B	現場と本部で連携し、本部 から放送で状況の伝達を 行うようにした。警察からの 助言を受け、マニュアルの 見直しができた。
	各学部、 学科の実 態に応じた 生活面に 関する指 導の充実	学校の規則や 社会のルール を順守する態 度の育成	予防的な指導 の徹底及び事後 (特別)指導 の充実を図る。	集会等で生徒会を 中心に呼びかけを 行い意識付けをす る。 また、職員間で情 報を共有し、組織 的かつ継続的な指 導を行う。	B	集会等でルールやマナー について話をし、適時全体 で考える機会を設定した。 また、生徒の成長につながる よう、「前向きな生徒指導」 というスタンスで取り組むこと ができた。
人権教 育の推 進	命を大切 にする心を 育む指導 の充実	児童生徒の自 己肯定感を高 め、互いの良 さを知り認め 合う学校づくり	人権意識が高 まるような学習 内容について 検討する。	6月の「心のきずな を深める月間」、12 月の人権週間に、 集会や取組を設定 する。12月には、全 児童生徒で共有で きる場を設定する。	B	各学部・学科で、実態に合 わせて取り組むことができた。 12月の全校集会で、互 いに取組の共有ができたこと は良かったが、時間が足り ないため、内容・実施方 法の検討が必要である。
	人権意識 の向上	職員の人権意 識の向上	学期1回、取組 の記録をとり、 各学部・学科で 検討する。 人権意識の向 上を図る。	記録を基に、職員 間の共通理解を 図り次の活動に活 かす。 人権レポートを作 成し発表し合う。	B	各学部・学科で、取組の記 録をとって、職員間の共通 理解を図ることができた。人 権レポート研修では、レポ ートを読み合っ、互いの取 組を振り返ることができた。
いじめ の防止 等	いじめ問 題の未然 防止の取 組	各学部、学科 の実態に応じ た取組の実践	特設した取組の 充実と、日常的 な取組の徹底 を図る。	校内研修を実施し 、必要に応じて見 直しと改善を行う。 また、取組後に成 果と課題をまとめ、 職員間で共有でき るようにする。	B	各学部学科及び寄宿舎で、 実態に応じた取組ができた。 また、児童生徒の日常的な 関わりの中で、機会を捉えて 職員間で共通理解を図りな がら、連携して取り組むこと ができた。
	いじめの早 期発見と 適切な対 応	いじめの発見 につながるア ンケートの実 施	アンケート結果 を基にした実態 把握、早期介 入及び継続的 支援を行う。	匿名性が保てるよ う配慮してアンケ ートを実施する。結果を 職員間で共有し、 問題事案が生じた 場合には、組織的 かつ継続的に対応 する。	B	記入場所、期間、提出方 法を工夫して、アンケートの 匿名性を確保した。 いじめや悩みを記入する生 徒が増え、早期発見・早期 対応に繋がった。加害生徒 に対して、きめ細かな指導 と、被害生徒に対して、継 続的な支援ができた。
地域 支援	特別支援 教育に関 する校内・ 外での理 解啓発	教職員の専門 性向上	特別支援学校 のセンター的機 能充実事業を活 用して自校の教 職員の専門性 向上を図る。	職員のニーズに応 じた講話研修を計 画する。自校の教 育相談に専門性 の高い講師を依頼 する。	B	講話後のアンケートではお おむね好評であったが、基 礎的な内容で物足りない との意見もあった。専門家 による教育相談も役立った。

		校外での特別支援教育の理解啓発	指導力向上研修、基礎講座を宇城教育事務所と連携して実施し、特別支援教育の理解啓発を図る。	小中学校の特別支援教育コーディネーターと協力し指導力向上研修を運営する。地域の特別支援教育の力量を高めるため基礎講座を企画運営する。	B	指導力向上研修:滞りなく実施できた。講師と運営者を分ける、当日の本校職員の動きなど課題もあった。基礎講座:SSTについての講話演習を行い好評であった。自立活動の実践、交流学級との連携などの悩みが出されたので、次年度に活かしたい。
	一人一人の教育的ニーズの把握に基づいた支援	校内支援の実施	各学部学科分教室で支援推進部員、学部主事、学科主任を中心に児童生徒にかかわることについて相談を受ける。	各学部学科だけでの対応が難しい事例については校内支援委員会を開催する。授業については支援を受けたい事例等を集約して対応するよう支援推進部で検討する。	C	各学部の学科で対応している。校内支援委員会を開く事例はなかったが、今後は共通理解を図る場として会を開催したい。校内支援については学部により差が出ている。部として授業に対する助言等は未実施で次年度検討する必要がある。
		巡回相談及び教育相談の実施	校外からの巡回相談及び教育相談に可能な限り応じる。	特別支援教育コーディネーターを中心に校内の巡回相談員が協力して巡回相談、教育相談に応じる。	A	巡回相談を特別支援教育コーディネーターが中心に171回行った。複数での対応、コーディネーター以外の巡回などでできず、次年度検討する必要がある。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	防災等の危機管理体制の構築	防災型コミュニティ・スクールに係る学校運営協議会の推進	地域と連携した災害マニュアルを策定する。	学校運営協議会を5回開催し、委員の方々の意見を参考に、震災時における地域との協力体制を検討する。	B	学校運営協議会を4回開催し、委員の方々からご助言をいただきながら、津波発生時の避難場所及び方法を見直し、新たに避難マニュアルを作成することができた。
		本校の福祉避難所としての在り方の検討	福祉避難所としての在り方を協議し、役割を明確にする。	学校運営協議会を5回開催し、本校の強みを生かした避難所運営について意見を収集し、助言をいただく。	B	学校運営協議会にて、本校の避難所としての役割について協議し、地区の方々に学校施設を見学していただいた。また、児童生徒在校時の避難所運営マニュアルを新たに作成した。
保健安全指導	児童生徒職員の安全を守るため、地震津波・火災等の避難に関する取組とヒヤリハットの取組の充実	避難マニュアルの確認及び訓練をおとした職員の意識の向上	訓練の実施計画と避難マニュアルを改善する。	実施後の改善点を集約し、次回の実施に向けて直後プランを作成する。また、必要なものは避難マニュアルに反映する。	B	本校・分教室とも第1回の避難訓練実施後、改善点を反映させた直後プランを作成し、提案できた。学校CS会議等で出た内容も踏まえ、地域と連携した防災体制の構築に向け、検討を進めているところである。
		危機管理に関する職員の意識の向上	ヒヤリハット事例を事故の未然防止に生かす。	報告書式及び報告の流れの見直しを行う。重大事案は朝会で全体へ報告を行う。それ以外のもは、各学部内での報告とともに、分掌部会の中で各学部学科から報告する機会を設ける。	A	報告書式及び報告の流れを見直したことで、担当分掌部としてヒヤリハット事案の把握が確実にできるようになった。また、重大な事案だけでなく、ヒヤリとしたことも報告があがるようになった。分掌部会の中でも情報の共有化が活発になり、職員の意識の向上にもつながった。

	医療的ケアの適切な実施の推進	実施要項に基づいた適切な実施	医療的ケアに関する事故を起こさない。	日常的に関係者間での連絡を密に取り合うとともに、ほほえみ連絡会での共通理解と体調急変時の対応マニュアルの確認及び改善を行う。	B 1学期に保護者から医療的ケア中止の申し出があり、手続きの手順を整え、対応した。医療機関や看護師、保護者、関係職員間での連携を密にすることで、今年度も安全に対応することができた。
情報教育	ICTを活用した教育の情報化の推進	授業におけるICT活用の推進	ICT活用の推進に伴う職員研修の実施	効果的な支援方法及び実践事例を提案する。	B 県の依頼や職員のニーズ等を受けて研修を計画・実施した。今年度は3回計画・実施し、内容も職員にとって充実あるものになるよう努力した。
			ICT活用の推進に伴う更なる環境整備の実施	必要な機器については優先順位を立て、購入する等の計画を進める。校内ネットワークの整備計画を行う。	C 今年度初めに備品や消耗品の希望を伝えたが、計画的な購入ができず、情報教育の充実や環境(ネットワークの修理等)に影響があった。今後、各種助成申請も検討したい。 校務PCの入れ換えを兼ねて、旧PCを数台残し、Windowsのアップデート等を実施し、テレビ会議・職員研修等に使用できるようにした。 校務PC・教育PC・校内ネットワークの整備に日頃から取り組んだ。不具合等は早急に対応し、必要に応じ教育政策課やICT支援事務所に相談し、解決できるようにした。
		校務の情報化の推進	校務パソコン及びOfficeの入れ替えに伴う計画を立案し、混乱なく実施する。	校務パソコンの入れ替え等において、混乱なく、入れ替えができるよう、十分な準備を進める。基本的な使用方法について、研修等を実施し紹介する機会を用意する。	A 校務 PC 入れ換えについて、事前に計画・シミュレーションを担当と重ねた結果、職員の協力もあり、大きな混乱もなく入れ替えることができた。また、ゆうネット等システムの使用について、必要に応じて教育政策課に相談・指示を仰ぎ、全職員に伝えた結果、問題なく運用できている。 Officeのバージョンアップについて、夏期休業中を利用して実施した。特に氷川分教室は90台ほどの教育PCを本校職員も動員して作業を進めた。
寄宿舎指導	互いの個性や良さを認め協力し合いより良い寄宿舎生活の実現	一人一人の心身の健康の保持と、長所の伸長	事例研や普段の情報交換で職員が思いを語り合い、適切な指導支援に努める。	B 太鼓の練習や、それぞれの課題に向けての挑戦などで頑張っていることを保護者や学校職員にも発信する。生徒との対話や、職員同士の共通理解を図ることで、指導力	B 事例研を5回行った。児童生徒とのよりよいかかわりや、指導のあり方について語り合う機会を持つことができた。 太鼓の練習や行事に向けての準備などで、自分の持ち味を生かし、仲間と協力する姿が見られた。適切

				や人権意識を高める。	な指導や支援については、引き続き研修や振り返る場が必要である。
		いじめやからかい等の予防的対応や早期発見	「いじめ、からかいゼロで明るくたくましい松支寄宿舎」を構築する。	わかば会活動として、児童生徒が主体的に活動することで生活を充実させたり、児童生徒の好ましい言動などを紹介したりする。生活面で気になる生徒には、早期に面談を行うなどの積極的な対応をする。	C 生徒同士のからかいや軽度ないじめの事例が各棟で見られた。その都度学科や保護者と連携しながら早期に対応した。 職員の舎生への不適切な言動も見られた。今後も自分たちの指導が、心に届くものになるように見つめ合うような場や普段からの語り合いなどの必要性を感じている。

<p>4 学校関係者評価</p> <p>○個々の力を伸ばすためや、自立に向けて力を身につけさせるためのいろいろな体験が実施されているので、素晴らしい。</p> <p>○学校間交流だけでなく、販売学習や学校行事等で地域交流ができていますので、子ども達が地域に溶け込みやすい。</p> <p>○ボッチャ競技を学部・学科を超えて実施し、1つのことに取り組んでいるのが良かった。ボッチャが広がりを持ち、今後の財産となると感じている。</p> <p>○「生徒と企業の懇談会」は、多くの企業や事業所に参加いただき開催されている。その仕掛けや準備は大変だったと思う。とても良い企画なので、続けてほしい。</p> <p>○生活指導部の問題行動における指導方法は、参考になる。</p> <p>○超過勤務の問題は、自分自身の健康管理とともに、教師自身が仕事の量をコントロールすることも大切である。</p> <p>○増加する放課後デイサービス利用の実態把握と連携は大変であると思う。</p>

<p>5 総合評価</p> <p>専門学科創設10周年記念行事は、実行委員会を組織して年度当初に年間計画を作成し、実施に向けて話し合いながら生徒主体に取り組んだ。4月にはロゴマーク、キャッチフレーズを生徒から募集して決定した。「創設10周年を祝う会」では、「合唱コンクール」や「作業製品販売会」を行い積極的に活動し、生徒自身も満足感や充実感を味わうことができた。</p> <p>知肢併置校及び分教室設置校として、特色ある学校づくりを推進するため、全児童生徒参加の「校内ボッチャ大会」を開催した。全校で1つの競技に取り組み、全校児童生徒、保護者等観戦の中で応援でも盛り上がり、互いを認め合う素晴らしい大会であった。</p> <p>昨年度から防災に関する課題を明らかにし、避難マニュアルの見直しを行ってきた。本年度は防災主任を中心にして、防災型コミュニティ・スクール学校運営協議会を開催して、委員の方々から意見や助言をいただきながら、津波発生時の避難場所及び方法を見直し、新たな避難マニュアルを作成した。</p> <p>授業充実のため、新学習指導要領を踏まえながら、これまでの研究の成果を生かして各研究グループ及び学部・学科で、学習内容の系統性や卒業後の目標を目指して各種ツールの見直しや評価の在り方について取り組んできた。これまでの教材を蓄積して、年間計画に教材をリンクさせて整理することができた。</p> <p>カリキュラム・マネジメント推進委員会を設置したことで、行事の見直しを直後プランで実施し、次年度へ円滑に繋げることができた。</p>

<p>6 次年度への課題・改善方策</p> <p>(1) カリキュラム・マネジメントの推進 カリキュラム・マネジメント推進委員会の在り方を検討して、教育課程編成の検討や行事の見直しに取り組むとともに、職員の負担軽減を図りたい。</p> <p>(2) 防災型コミュニティ・スクールの構築 本年度の取り組みで、防災への意識が高まった。次年度は、避難訓練を系統的に実施し、段階を踏んだ避難訓練を実施するとともに、地域と連携した防災体制の構築に向けて取り組みたい。</p> <p>(3) 専門性の向上 校内研修を充実するとともに、研究部を中心にこれまでの研究の成果を生かしてツールの活用、実践充実を図る。</p>
